

編集室から

今年は例年に無く早い梅雨明けでした。節電の夏なのに...と思っていたら、7月下旬から雨がちな空模様。御蔭でなんとか職場で未だクーラーをつけずに頑張っています。

ただ、新潟や会津・只見地方は先日の大変な豪雨に見舞われました。福島県は浜通りと会津の2地区が大規模被災した状況で、なんとも言葉になりません。

東北では直接の被災は免れたものの、秋田・庄内など日本海側で観光客が2割になった(なんと8割減!)という極端な減り方になす術も無いと悲痛な情報が入っています。東北地方は、6県の夏祭りを広く周遊する旅行コースが定着していました。広域連携の先進事例として全国的にも知られていたのですが、逆にその一角の被災で全体がダウンするという連鎖反応が、残念ながら起きています。

東北に何かと機会を創って通いたいと思っていましたら、今月末日から2泊3日で、仙台方面に研修の引率で参るご縁を頂きました。みなさまもこの夏、如何でしょうか?

また、海外から日本にお客様をお迎えする旅行(インバウンド)に注力している地元の旅行代理店が、世界に向けて100日間日本を旅するボランティアのカップルを募集しています。

ネイティブの目で日本の現状を報告してもらい、日本旅行回避の世界超流に一石を投げようという企画です。この動きは、海外では相当な注目を集めていて、ドキュメンタリー番組化の話もあるそうですが、肝心の国内からの反応がサッパリだそうです。不利な形勢を逆手に利用して一気に逆転を果たすのは、なでしこジャパンだけではありません。大切なのは諦めない事。自分たちの底力を信じる事。そうすると奇跡を呼び込める...。彼女たちは身を以って教えてくれたと想うのです。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2011/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2011/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

景 月



奈良・橿原神宮にて
by hama

負けるな東北!
忘れるな日本!

東北へ旅に出かけて
復興を応援しよう!

寄稿『山代温泉縁起に想う』

あらや滔々庵 十八代館主 永井 隆幸

生まれ育った加賀・山代温泉の薬王院に今も残る「温泉寺略縁起」には“神龜二年（七二五年）行基菩薩当国白山に登りたまふ時、初めてこの温泉の奇特あること感じ在まして、自ら薬王善逝および日光月光十二神の像を刻したまへ、温泉の守護のためとて石窟の内に安置したまふ”とあります。

日本は火山国であるため世界的にも温泉が多い上に、一九九〇年代以降は地域興しの名の下に温泉の開発が進み、今日では全国いたる所に温泉施設が存在します。ただこれら温泉の多くは千メートル以上も掘削し、半ば強引に汲み上げているのに対し、山代は地下わずか数十メートルからほぼ自噴に近い形で大量に湧き出している、という非常に恵まれた温泉であります。これが千二百年もの間、一時も絶えることなく湧き続けているのですから、先祖代々享受されてきた恩恵は計り知れません。

この豊かな温泉を愉しみに今もなお年間約百万人の方が遠路よりお越しいただいておりますが、悲しいかな当地の住民のほとんどは電気や水道と同じように当たり前になりすぎて、その意味が余りにも希薄になってしまっているように見受けられます。

昨今のまちづくりにおいては施設や街並に目を奪われ、利便性や経済性といった現在価値ばかりを優先しがちですが、それぞれ土地が育んできた独特の文化を理解することで何が大切かより明確になります。更には本質、山代でいうところの温泉そのものを敬い、誇りとするこゝで、その地に住む人々のアイデンティティーが確立され、長い歴史を後世に守り伝えていくという重要な役割を果たすことが出来ると考えています。



【プロフィール】
（ながいたかゆき）一九七二年
石川県生まれ 一九九四年早稲
田大学商学部卒。翌年Y M C A
国際ホテル専門学校ホテル専攻
科卒。一九九八年「あらや滔々
庵」代表に就任 現在に至る

濱のつばやき 『長寿の守り』

石川県在住で静岡県ゆかりの方々のお世話をさせて頂いている。その関係で先日、航空自衛隊小松基地への見学機会を頂いた。航空自衛隊は、浜松に学校があり、隊員のほとんどはその出身者との事で、県人会会員の資格をお持ちであることになる。

小松基地は、日本海側唯一の基地である。また、広大な日本海を控え、救助隊の装備も充実していた。やはり戦闘機を間近に見るとその大きさに驚く。聞くと、一つで鉄腕アトムと同じ馬力のエンジンを二つ持っているという。鉄腕アトム二人に抱えられて、空へと向かうパイロットたち…案内いただいたどの飛行士たちも、実に親切だった。中でも、救援系の彼らの口から、ポツリとこぼれた一言が忘れられない。

「僕らが飛ぶときは、たいてい悪天候の厳しい時が多いですね」…。

普通のパイロットや船が救援を求めるほどの条件のほど出勤要請を受ける。それが自らの任務であるという。小松からも東北に応援に飛んでいる。若い彼らの瞳が、澄んで輝いていたのが印象的だった。

ほぼ同じ頃、大学でご指導いただいた先生の古希の祝いが開かれた。一人の先輩の挨拶が心に残って

いる。

生産年齢人口は、十五歳から六十四歳とされている。これは、平均年齢が六十八歳の頃に定められたものだそう。現在日本人男性の平均寿命は約七十九歳であるから、これを比例計算で延長する必要がある、そうするとおよそ七十四歳までは、生産年齢とすべきであると先輩の言。先生にはまだまだ活躍してもらわねばならないと、締めくくった。

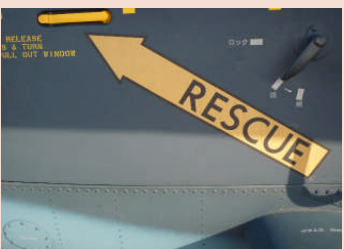
前年重い病を得て快復された先生に、弟子が敢えて放った励ましの一言だった。

「平均値」であるから、理論的に七十九歳を超える長寿の男性は、半数いる。

今年、実父と岳父が傘寿を迎えた。ともに平均を越えた事になる。

寿命が延びることは古来、目出度い事とされてきた。それは、日々の暮しが安寧である事とも密接に関係している。この平和な暮らしを、誰が支えているのか。誰が、どのようにして、安心して経済活動・社会活動ができるようにしているのか。

現実をしっかりと見据える必要があるはしまいか。



この写真は、許可を得て撮影したものです。

きただより49 弘前大学地域社会研究会 上村 康之 『モンゴルに使用済核燃料の最終処分地建設計画！？』

福島県の原子力発電所事故被害は、収束の様相がなかなか見えてこない。筆者の故郷である青森県も、複数の原子力関連施設を抱えて全く他人事ではない。

青森県太平洋側の海岸地帯には、北から順に記すと東通村の東北電力東通原子力発電所、六ヶ所村の核燃料サイクル基地に加え、三沢市の米軍基地と航空自衛隊三沢基地、それらの施設の間に米軍と自衛隊の射爆場があり立ち入り禁止区域も多い。新聞でこれらのことについて、載らない日がないくらいである。

もし、青森県が福島県と同様の事態になっていたら、どのようになっていたろうか。青森県の南部地方、下北地方一帯は、丘陵と台地が続く大局的にみれば平坦な地形であり、畑作や畜産などを中心とする農業地域でもある。人口集積は福島県に比べて低い、青森市、八戸市とも六ヶ所村からの距離は40～50kmほどである。もし、春から初夏にかけて今回のような事故が起きたとすれば、この地方特有の「ヤマセ」と呼ばれる北東からの季節風が吹き荒れることが多い。すると、青森県の東側半分、岩手県北部などは直撃である。このような想定をいくつか考えてみると、福島県と同様、あるいはそれ以上の被害が青森県にも、もたらされた可能性がある。

しかしながら、3月11日以降、電力、原子力をめぐる諸問題が噴出して続けて何を信じたらよいかわからない状況である。首相が「脱原発」を打ち出すと、政官財＋マスコミも含め抵抗し、これだけの大惨事をもたらしながら原発をやめるという流れになっていない。

このような状況のなか、目を疑うニュースが飛び込んできた。なんと、「昨年秋から米国と共同で、使用済み核燃料などの世界初の国際的な貯蔵・処分施設をモンゴルに建設する計画を極秘に進めている」とのことである。日本も米国も使用済み核燃料の最終処分場を持っていない。

2008年4月、国から青森県に六ヶ所村(核燃料サイクル基地:高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター)をあくまでも一時貯蔵ということで確約書が渡されている。しかし、「2035年までに国内に最終処分地を選定する」とはしているが国内でどこ自治体も最終処分場を引き受ける可能性がない。多くの青森県民には、六ヶ所が「実質的な最終処分場になるのではないか」という懸念がある。

他方、国内での最終処分地決定が困難だからとはいえ、モンゴルに金と技術を見返りに最終処分場を引き受けてもらうことが許されるのだろうか。まだまだ最終処分の技術の確立されていないなか、「核のゴミ」の輸出である。この動きには、結局は弱者が困ったものを引き受けるという、先進国と発展途上国の力関係が透けて見える。原子力政策(これ以前も大きなものがあるが)という国策によって翻弄され続けた歴史を抱える青森県の出身者として、そのようなことを美しい草原の国の人々に味わせていいはずがないと、思うのである。

『若き起業家達の情熱』 株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

大仰なタイトルとなってしまいました。決して『情熱大陸』のような感動ストーリーではありませんが、私の周りに最近増えつつある30代の若き起業家達について2回に渡ってお話したいと思います。今回は、東京下町の製造下請企業群の活性化に向けて日々尽力しているコンサルタントA氏(38歳)のお話です。彼とは以前の職場が同じで、彼は営業、私はマーケティングプランナーという立場でよくプロジェクトと一緒にやる機会も多かった事や彼の政治家になって日本の拝金主義構造を改革したいという理念(というより当時は妄想に近い)に興味を抱いたことから仲良くなりました。現在は、経営コンサルタントとして独立をし主に製造業を中心とした事業構造改革や研究開発機関、流通とのコーディネーションを事業ドメインとして活躍をしています。そんな彼の名言を3つほどご紹介します。

1. 『人生に適齢期はなし』

これは彼が35歳の時に会社を辞めて大学院に行くことになった際、退職の挨拶で言った言葉です。「思い立ったが吉日」と類似した意味だと思われます。当時まだ小さい子供が2人もいた中で、次のステップを見越して安定した地位を捨てての決断でした。

家族にとっては無鉄砲な夫・父親だったかも知れませんが、男としてはその姿に年下ながら敬意を表したものです。ただ彼の場合、無邪気すぎるのかちょっとネジが飛んでいるのか「適齢期」という言葉の意図を例えるために晩婚に差し掛かってきた女性達にもエールを送ってしまい、その後女性陣からのバッシングがあったことは言うまでもありません。

2. 『金は天下のまわりものではない』

彼が長年憂いている「拝金主義＝儲ければいいじゃん」を背景とした言葉だと思います。

つまり、金儲けそのものを目的化するのではなく、誰かを幸せにする、世の中の問題を解決にした結果としての対価として社会で生活していくツールとして金が存在する。何もしていなくても、もしくは社会的価値提供をしていないところにも金が流れている事に憤りを感じているのです。

例えば、小学生のあこがれの職業にキャバクラ嬢がランキングされたり、ラクして儲ける事が正しいような現代の風潮を後押しするようなメディア情報だったりすることには辟易します。彼はよく自分の娘がキャバ嬢に憧れないようにするために日々考えているそうです。先日は「敢えて情報隔離をするのではなく、偏った情報だけを摂取しないように今度子供を連れてキャバクラに行ってくる」と言っていたので、まず入店ができないことと、キャバ嬢に幻滅する前に大人の男性に幻滅すると思うよと言ってあげました。

3. 『右肩上がり一旦放棄してみる』

これは私の価値観と非常に近いのですが、高度成長期以降、日本がとりつかれてしまった幻想である「右肩あがりの経済成長」「GDPでしか測れない国の豊かさ」という価値基準を一旦とっばらいましょうということなのです。

その上で、自分にとっての幸せの絶対的価値(つまり人と比べてということではなく)を考えてみるということです。ちなみに彼の絶対的価値は「家族の笑顔」だそうです。忙しい中でも一緒に過ごす時間を大事にするため職住近接ならぬ同一にしています。ただ最近中学生になった長女の理由のない父親嫌悪がはじまってしまい彼に笑顔がありません。

とまあ、非常に熱い志をもちつつも、どこかおちゃめなA氏ではありますが、日々日本がどうすれば幸せを提供できる国になるか、また住む人々が笑顔でいられるかを真剣に考えています。私も一生の友人として彼を支えていきたいと思っています。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

ポートランド・ライフスタイルツアー2011/7/7~7/13 静岡県職員 溝口 久

（株）創研研究所の松本大地さんから「Qさん、ポートランドは素晴らしいんだよ。全米で最も環境にやさしい都市。暮らしたい都市NO.1に選ばれているんだよ。人や街の個性を尊重しながら楽しむ特有のライフスタイルがあって、その魅力に毎週500人の新たな住民が誕生している、それも21歳から35歳の若者だよ。まさに持続可能な成長を続ける都市なんだ。一度行ってみたい。」との誘いを受けていた。

由布院で10年近く前に持続可能な温泉観光地であるためにとの議論をしていたことを思い出す。経済中心の観光地開発をした結果、衰退していく温泉観光地が多い。一方、地方都市では、郊外に大規模宅地開発、大型店舗の出店により、中心市街地は寂れる一方。かつての人気の住宅地も人の新陳代謝が進まず高齢化し、買い物難民化という言葉も出ている。このところの都市の寿命は2,30年なのかと思ったりする。

持続可能？ぎこちない響きを感じつつ、持続可能な都市「ポートランド」ってどんなものかふつつと興味がわいてきた。今年は夏の節電もあって休むことを強く勧められているので、思い切って「松本大地と行くポートランド・ライフスタイルツアー」に参加することにした。

ポートランドは、アメリカ西海岸カルフォルニア州の北にあるオレゴン州に位置する。人口56万人、都市圏人口220万人、緯度は稚内とほぼ同じ、滞在期間中は朝方15度、日中25度程度、湿度が低く、とても過ごしやすい。

成田から直行便で8時間、現地に着くとガイドの谷田部さんが待っていてくれた。氏は18歳の時にレスリングでオレゴン州立大学へ留学、その後現地東京銀行でお仕事をされ、奥さんはアメリカ人、孫にも囲まれ、すっかり土地の人になっている。単なる観光ガイドではなく、経済、都市計画にも精通され、視察を多く受けていることが伺える。

コロンビア河を横目に道中、滝の名所ワキナーフォールズ、マルトノーマフォールズを見て、昼食を1980年まで学校として使われていたケネディ旧小学校でとった。校舎はレストラン、バー、シアター、ビール工房、ギフトショップ、ホテル、近隣のための会議室や広場に改装されている。

食事は多くの種類を少しずつ口にと、皆で異なるものを注文し分け合った。この料理をシェアすることはアメリカ人はしないようだ。ターミネーターと書かれたビールを注文、どんなストロングなビール



が出てくるのか少し心配していると、泡が無いほどグラスの縁までなみなみと注がれた黒ビールが出てきた。泡立ちを命とするビールが、、でもこのあるビールをちびりちびりも悪くはなかった。その後、泡3割のビールが出てきたことは一度も無かった。

食後、アルバータストリートに向かった。アルバータは黒人が多く住み、ポートランドの中でも治安が乱れていたエリアであった。人が寄り付かなくなったこの地区の再開発に市は乗り出すことになるのだが、さてどうする。メインストリートにアートの力を注入することにより再開発を試みた。アーティストを通りに面した空き家に格安の家賃で入居を誘導、ここでの彼らの活躍に期待したのである。アフリカ系の原色溢れた壁画やファンキーなファッションや雑貨店、エスニックなレストランが次々にできることで、ストリートの姿を変えていった。今や多くの若者が集まり、個性的なライフスタイルを楽しむアルバータは良好な住環境に変貌している。

「マチの再生に何が必要？」と訊かれることがある。

「ヒトだよ、ヒトの誘致をすること。宿命的土着民を変える事は容易ではないけど、選択的土着民をどう誘導するか。活性ガスを入れないと活性化しないからね」と答える。

初日レストランで夕食後、車を進入禁止にした通りにアートの市が立っていた。交差点が広場になりミュージシャンが、ドラムセットではなくポリバケツセットでノリのいいリズムを打ち出す。車輪のついた屋台の椅子に腰掛け、足元なぜかあるペダルをこぐと動き出す移動式バーがあり、受けていた。平日の夜ではあったが、大にぎわいだった。ここはパールディストリクトという鉄道の操車場や倉庫の跡地を再開発したエリア。20数軒の画廊は第1木曜日になると一斉に作品を入れ替える日とし、画廊はオープンギャラリーになり、3つのブロックの路上では新人アーティストやクリエイターの発表や販売の場となる。これはファーストサーズデー・ギャラリーウォークというイベントで、多いときは一晩に3万人の来訪者がある。視察第1日目を7月7日木曜日にした松本大地さんの意図がありがたかった。

さて、ダウントウンでは幅広い歩道や広場、公園にアートが風景になり、アクセントを加えるごとく置かれている。オレゴンでは公共事業費の2%をアートに配分することになっているとのことだ。アートが身近な公共空間にある、このこともポートランドの心地よいライフスタイルを支える一つになっている。（つづく）

